

新・下野市風土記

続々々 三悪人？



下野市教育委員会 文化財課

先月号で、道鏡についてお話ししました。その中で、淳仁天皇・藤原仲麻呂vs孝謙帝・道鏡の対立構造が出来上がったことは既に述べたとおりです。権勢に陰りが見えだして、仲麻呂は相当焦ります。天平宝字8（764）年9月、仲麻呂は新設の「都督四畿内三関近江丹波播磨等国兵事使」に任じられます。この役職は近畿地方諸国管内の兵の招集・観閲が認められていました。9月5日、仲麻呂は必要以上の兵を集め、軍事力で政権を奪取しようと図りました。指示を受けた大外記高丘比良麻呂が、仲麻呂を裏切り孝謙帝にこの計画を密告します。さらに、陰陽師の大津大浦も裏切り密告。9月11日、度重なる通報を受け、孝謙帝は、皇権の発動に必要な鈴と印（御璽と印）を奪取。これを知った仲麻呂は、息子の訓儒麻呂を派遣し鈴印を奪回。孝謙帝は、ただちに授刀少尉坂上菟田麻呂（征夷大將軍田村麻呂の父）と授刀将曹牡鹿嶋足を

派遣して、訓儒麻呂を殺害します。この後、小競り合いが続き、孝謙帝は仲麻呂一族の官位と藤原の氏姓を剥奪。全財産の没収を命じ、さらに三関（伊勢国の鈴鹿関、美濃国の不破関、越前国の愛発関）の固関を実施し交通を遮断。仲麻呂は一族を率いて平城京を脱出。宇治を通過し、地盤である近江国の国衛を目指しました。孝謙帝は、造東大寺司長官の吉備真備（70歳）を討伐軍のトップに任命し軍を派遣。真備は仲麻呂をはじめとした藤原一族のために不遇な境遇にあった人物で、軍事については遣唐使として在唐中に学び優れており、勢多橋を焼いて東山道を封鎖。越前国府に逃げようとするが失敗して三尾（近江国高島郡）に退却。9月18日に琵琶湖の湖上で捕まり一族と共に殺害されました。この乱の後、仲麻呂側の勢力は政界から一掃され、淳仁帝は淡路国に配流されました。ここに孝謙帝が重祚し、称徳天皇となります。以

後、この乱の反動のように称徳帝と道鏡による独裁的な政権運営となり、前回書いたように国家財政も治世も辛苦を重ねることとなり、悪政の責任はすべて道鏡にある＝悪人道鏡の公式が出来上がります。

道鏡が聖武期の東大寺と法華寺を意識し、平城京の西寄りに西大寺、西隆寺という二大寺を造営したことも前回述べました。西大寺は、近鉄奈良線の大和西大寺駅の南西200mに所在します。春の茶会で直径60cmくらいの大きな茶碗を使うシーンがニュースに取り上げられる寺院です。現在は、伽藍の大半が個人住宅になっていますが、建て替えなどの際に発掘調査が行われ新たな発見がニュースとなっています。筆者も30数年前の学生時代、現金堂の北側のお宅に下宿していました。庭の犬小屋にいる犬をふと見ると庭を掘っています。20cmくらい掘るとそこからなんと緑釉の瓦片が出てきました。そのお宅の人は平然としていましたが、奈良はこのように足のすぐ下が1300年前につながる可能性があります。一方西隆寺は、現在、何も残っ

ていません。大和西大寺駅の北東、大型ショッピングセンター及び大手銀行建設の際に調査が行われました。寺域は約250m四方の大きさだったと想定されており、駅から平城宮大極殿へ向かう道筋には堀の跡などがカラー舗装され、大手銀行北側には塔跡が舗装されず保存されています。

西大寺も西隆寺も道鏡主導により建立された寺院です。当時の国政・国家財政を預かる官僚からすれば、東大寺の建立以降、保良宮の造営、平城京の改作など建設経費の支出超過のところに西大寺・西隆寺の建設は頭痛の種だったことでしょう。さらに、称徳帝の派閥に連なる道鏡の一族・一派の出世はどのように感じたことでしょうか。特に弟の弓削浄人は神護景雲2（768）年には大納言に任命されています。11月には浄人は大宰師に任じられています。そのような鬱々とした時勢の中で、神護景雲3（769）年の宇佐八幡神託事件は、一種のクーデターですが失敗に終わります。